

いい加減な夜食 外伝
陰の男たち

秋川滝美 Takimi Akikawa



アルファポリス文庫

目次

いい加減な夜食外伝 陰の男たち

5

【書き下ろし番外編】

いい加減な警護

353

いい加減な夜食外伝 陰の男たち

第一章 手招きする過去

「作戦開始十分前、各員配置につきました」

イヤフォンから聞こえてくる英語の音声を聞き流しながら、大澤伸行は脇に置いていたカップ麺を手を取った。

発泡スチロールではなく、プラスチックそのものといった容器からストレートに伝わってくる熱に眉を蹙めたあと、蓋を開けてフオークでかき混ぜ一口啜る。覚えのあるスパイシーな味に、眉間の皺が深くなった。

「日本の奴をそのまま売ればいいものを、なんでわざわざこんな風にするかな」

「チキン&カレー」と銘打たれているが、日本のものより味も色も薄いスープ。

日本で暮らし、日本の食べ物に慣れた舌には、外国人向けにアレンジされたカップ麺は馴染まなかった。

海外生活が長引き、これしか手に入らなかった頃は、こんなカップ麺ですら日本を彷彿させる懐かしくて貴重な味わいだっただ。

けれど、今の大澤にとって日本は遠い祖国ではない。今この地にいるのはただの偶然、というかとばっちりもいいところなのだ。

「山本つつあんが作る本格派ラーメンとまでは言わないが、せめて姫さんのタンメンもどきが食いてえ」

鍋で沸かした湯に、適当に刻んだ野菜や肉を麺と一緒に投入。さらに生卵も割り入れ、固まった頃にスープを混ぜ込んで出来上がり。水も時間もまともに測っているようには見えないのに、そのインスタントラーメンはけっこう旨かった。

原島財閥総裁原島俊紀の妻である佳乃が作る夜食は、当初は俊紀のためだけのものがあったが、今では時折緊急対策班の面々が相伴することもある。突発的な仕事で打ち合わせが深夜に及んだときなど、俊紀が夜食を所望すると、それでは……とばかりに、佳乃が夜食を作る。作り方も分量もいい加減な、なんちゃって料理とはいえ、それでも最

初はリゾットだのうどんだの、そこそこ体裁が整ったものだった。だが、最近になって、とうとうインスタントラーメンが登場した。原島財閥総裁にインスタントラーメンとは……と班員たちは絶句し、原島邸主任シェフの山本は天を仰いだ（やまもと）が、本人は平気（へい）の平左。

『庶民の味を知らって大切なことですよ』

なんて笑いながら、上等の器に「一パック五袋入り二九八円」のインスタントラーメンを入れて差し出す。俊紀は、それが佳乃の手によるものならなんだってありだ、といわんばかりにきれいに平らげ満面の笑みを浮かべる。どうかするとそのあとあれこれ……

結婚して何年も経ち、生まれた子どもがそこから走り回る年齢になっているというのに、あいも変わらずバカッブル上等のいちやこら具合。正視できない班員たちは、本日の肉の種類で運勢占いでも始めるほかはなかった。

冷凍庫の隅っこに半端に残っているような肉で作るから、肉の種類は様々。豚や鶏ならまだしも、牛肉や鴨肉といったインスタントラーメンにはもったいないと思うようなものが使われているときもある。

野菜の間に紛れている細切れ（こま切れ）を口に入れてみては『お、豚だ。まあ平穩無事ってとこ

だな』とか『うーん、鶏か。味噌ラーメンにはちよつとあれだな。せめて塩なら小吉だったのに……』とか呟く。もちろん、根拠などあるわけがない。

一度だけ牛タンが紛れ込んだときがあったが、そのときは大騒ぎだった。

『ちょ……姫さん！ これ、牛タンだぜ！ そりゃないだろう！』

『あらあー、じゃあ明日の運勢は大・大・大吉ですね！』

『そんなわけないだろう！ 身分違いもいところだ、こんな上等な牛タンをインスタントラーメンに入れちまったら牛が化けて出るって！』

『大丈夫ですよ、前に牛タン食べたのって一ヶ月以上前ですから、とーつくに成仏しますって』

『一ヶ月……賞味期限は大丈夫なのか？』

『冷凍してあったから平気ですよー』

『まったく相変わらずだな……。だが、牛は大丈夫でも山本つつあんが化けて出るかも……』

『山本さん、まだびんびんしてますよ？』

『凄腕シェフの生き霊のほうか怖いわ！』

そんなやり取りとともに口に運ぶインスタントラーメンは、腹ばかりではなく心にも

温かかった。

だが今、目の前にあるブラカップの中身には、とてもそんな効果は望めそうにない。それでも腹が減っては戦はできぬ、と無理矢理胃に収め、大澤は自分の持ち場に向かった。

「作戦開始まで一二〇秒。抜かりはないか？」

「準備万端です」

右手を一捻りすれば、目的の建物内は闇に包まれる。暗転が作戦開始の合図だった。腕時計のバックライトを点灯させ、男は秒針を睨む。

あと五十秒、三十秒、十秒、五、四、三、二、一……

「Charge!」（突入！）

遠くから男たちの咆哮が聞こえる。扉を打ち壊す音、そして銃声。

大澤のいる場所から建物の様子は確認できない。たとえそれができたとしても、呑気に眺めている場合ではなかった。トカゲのような身のこなしで梯子を上り切ったあと、大澤は照明が消えた建物目がけて疾走した。

* * *

原島財閥緊急対策班班長大澤伸行がそのメールを受け取ったのは、原島俊紀の一人息子、誠也が三歳を迎えた夏の深夜のことだった。

『頼みたいことがある。一度会いたい』

差出人の名前はB・B。

自分の人生において、もう二度と見ることはないだろうと思っていた名前だった。「なんで今頃……」

見なかったことにして削除してしまいたい気持ちと、それはかえって危険だと思っ気持ちがせめぎ合う。

どうやって自分のアドレスを掴んだのか、既に居所までも知られているのか。いずれにしてもやっかいなことになった……。自分だけならなんとでもなる。だが、万が一この原島邸の面々を面倒に巻き込むようになったら……と思うと、大澤はいても

立ってもいられない気持ちになる。

B・Bの正確な名前はわからない。なんの略なのか、それが本名なのかどうかも知らない。

大澤が知っているのは、彼は男性で、自分の親ぐらいの年齢。なおかつ、日本人ではないということぐらいだった。

緊急対策班詰め所の隅に置かれた三人掛けのソファに寝転がり、ぼんやりとメールの文字を見つめながら大澤は過去に思いを馳せる。

小学校を卒業したあと、大澤は家族とともにそれまで住んでいた街を離れた。

父親が商売に失敗して借金がかさみ、どうにもならなくなったのだ。原島財閥総裁の家の近所で、跡取り息子の俊紀ともずっと懇意にしていたのに、別れの言葉を交わすこともできなかった。

破産手続きをとったことで、父は家と土地を失い、肉体労働に就くことになった。一家の暮らしを支えるためにやむを得ない選択ではあったが、身体を使う仕事などしたことがなかった父は馴染むことができず、次第に酒に溺れるようになっていった。

仕事も怠りがちになった父は、当然のごとく首になり、やむなく母が夜の仕事に出る

ようになったあたりから、一家の暮らしはどん底へと突き進んでいった。

いつも酒臭い父、ため息と涙にくれる母、顔を合わせれば始まる夫婦げんか。そんな環境で真っ直ぐに成長できるほど大澤は強くなかった。

悪い仲間とつるみ、すぐに盛り場のチンピラとも関わり始めた。せめてそれぐらいは、と母親に泣きつかれて潜り込んだ高校は、ほとんどともに授業も受けないままに素行不良で退学処分。

さすがにこれはまずい……と感じたのは、兄貴分だった男にバックパックを渡されたときだった。

どこにでもあるような安っぽいバックパック。中を覗いてみても、何冊かの雑誌とスポーツタオル、それからスポーツドリンクが入っただけだった。

いかにも高校生が背負っていきそうなデザインと中身。そのバックパックの底が二重になっただけのこと気付いたのは良かったのか悪かったのか今でもわからない。

二重底の中から出てきたのは白い粉。自分の置かれている状況を考えれば、それが片栗粉とか小麦粉でないことは想像に難くない。末端価格でいくらになるかわからないような代物に違いなかった。

本人に知らせることなく運ばせれば、挙動不審にもならない。万が一捕まったところ

で、代わりなんていくらでもいる。切り捨てて終わりである。組織が、ちょっと粋がった高校生に行く末なんて考えるはずもない。

俺は運び屋にされる……それに思い至ったとき、大澤は自分があまりにも薄い氷の上に立っていることに気付いた。

逃げよう。こんなことやってたら俺の人生終わりだ。だが、俺を都合よく利用しようとした連中は許せない！

大澤は、言われたとおりに、そのバックパックを指定された場所に届けた。ただし、二重底に隠されていた白い粉は、抜きとって自分のポケットに入れた。

チンピラとその上部にいるヤクザたちが、運ばせようとしたものを抜き取った大澤を見逃してくれるとは思えない。悪友たちには家も知られている。ちよつと脅されれば、彼らは簡単に大澤の家のありかを吐くだろう。

さんざん悪さを繰り返して、ことあるごとに悶着を起こしていた警察に保護を求めらるなんて、考えもしなかった。第一、ヤクザ垂涎の白い粉は自分のポケットの中にある。ただでさえ心証のよくない自分が、そんな爆弾を抱えて警察に駆け込むなんて愚の骨頂

だ。

家にも戻れず、行く当てもない。考えあぐねた大澤にできたのは、普段の自分の生活圏から出ることだけだった。

あれこれ悩んだあと、大澤は日の出棧橋へ行き、東京湾クルーズのチケットを買った。飲食抜き、ただ乗るだけ、しかも日没間近のクルーズならば高校生の財布でもなんとかなかなえることを知っていたからだ。春とはいえ平日、桜を楽しむ川下りの船や夜景を楽しむクルーズは大人気でも、午後遅くの湾内クルーズならば、そんなに乗船客もいないだろうと踏んだ。

精一杯平静を装って乗り込んだ船のデッキで、万全を期すために日没を待ち、夜陰に紛れてその袋を捨てた。海水に溶けてしまうように穴を開けることも忘れなかった。

その後、駅前にあつたネットカフェで夜を明かした大澤は、今まで乗ったこともなかった路線の電車に乗り、適当に選んだ駅で降りた。

多くも少なくもない人出に紛れ、昼まではデパートや本屋で時間を潰した。だが、夜になれば素性の怪しい連中が活動を始める。普段の根城から遠く離れているとはいえ、彼らのネットワークは侮れない。大澤は人目を避けるように駅から離れ、住宅街に続き

そんな道を選んで歩き始めた。

周りを歩いていたら人々があちこちに消えた頃、小さな公園を見つけた。とにかく一休みしたいと入り込んだ公園で、大澤は植栽しょうさいに囲まれ人目につかないベンチに倒れ込んだ。それからどれぐらいの時間が経ったのだろう。泥のように眠り込んでいた大澤は、男の声で目を覚ました。

「にーちゃんどうした？ 具合でも悪いのか？」

中肉中背、年の頃は大澤の父親ぐらいだろうか。どこにでもいそうな、ごく普通のオヤジだった。

染めた髪、そり込んだ眉、険しい目つき。そのときの大澤は『ぐれてます』といわんばかりの風貌だった。

俺みたいなクソガキに、なんでこんなに気軽に声かけるんだ、このオヤジ！

隣を歩いている人間が倒れたとしても、関わり合いになりたくないとスルーする人間は多い。それなのにわざわざ公園の奥までやってきて声をかけた男に、大澤は驚きを隠せなかった。

それでも虚勢きよせいを張り続け、あらゆるものへの罵りが習なら性しょうとなった口からは、かわいげのない言葉が飛び出していく。

「うっせーよ！ かんけーねえだろ！」

その男は、大澤が吐き捨てるように返した言葉を気にも留めなかった。逆に、面白いものを見つけて嬉しくて仕方がない、とでも言いたそうな笑みを浮かべて言う。

「わかりやすいなあ。久々にこんなに教科書どおりにぐれてる奴を見たよ。元気でけっこう」

「ぐれるのに教科書があんのかよ！」

「あるんじゃないのか？ にーちゃんほどステレオタイプじゃないにしても、ぐれてる奴らってどっか似通ってる。あれはきっと見本があるんだろうさ」

まあ、オリジナルでぐれられる奴ならもつと違うことやってそうだな、と男はかかたいしよう 呵呵大笑した。

そのあっけらかんとした笑いに毒気を抜かれ、まあ……そうかも、とってしまったのだから、やはり大澤は基本的に素直な性格だったに違いない。

「見た感じ高校生ぐらいだが、このあたりじゃ見かけねえ顔だな。教科書どおりにぐれてるくせに、繁華街でもないこんな公園に行き倒れてるんだから、地元でなんかやらか

して逃げてきたつてどこか？」

行き倒れというのはあんまりだと思ふものの、自分の置かれている状況をずばり言い当てられて大澤は目を見張った。その表情で自分の想像が当たっていたことを確認した男は、そうかそうか、そりゃまた元気なこった、と笑って「飯でも食いに行かぬーか」とさりと誘った。

「金ねーよ」

財布の中身はここに来る電車賃で尽きていた。

「ガキを誘って金払わずほど落ちぶれちゃいねえよ」

見くびるんじゃねえ、と睨み付けてきた男の視線が、そこらのチンピラよりずっと鋭くて、大澤はとつさに、すんません、と謝ってしまった。どこにでもいる中年男だと思つたのは間違いだつたかもしれない。

いいつてことよ、とすぐに険しい目つきを引つ込めて、男は大澤を連れて歩き出した。

「ガキはお断りだ」

男は大澤を連れてしばらく歩いたあと、商店街に足を踏み入れた。行きつけらしき一軒の引き戸をくぐるなり、無愛想な声が飛んできた。男は軽く会釈し、声の主を片手で

押む。

「すまねえ大将、ちよいと訳あり臭い」

「まったく……また拾いものかよ。あんたもよく物好きだな」

「いいじゃねえか。暇なんだよ、俺は。それより、こいつになんか腹に溜まるもん食わしてやってくれ」

「だから、ガキは困るつて……いや、待てよ、お前いくつだ？」

「十八」

「ならまあいいか。飯は食わさんでもないが酒は呑むなよ！」

「呑まさねえよ！」

この俺がそんなことさせるわけねえだろうが……とぶつぶつ言いながら、男は大澤を小上がりに追い上げ、境の障子をすつと閉めた。

それから店を出るまでの間、その障子が開いたのは、大盛りにされたカツ丼二つと大きな湯呑みに入れられた焙じ茶、それから男が呑むための日本酒のグラスが届けられたときだけだった。

「ま、なんか白状するときはたいていこれだな」

日本酒を一口ぐびりとやったあと、箸を取った男は湯気の立つ井から半熟卵を纏ったカツを挟み上げて口に運ぶ。甘辛い匂いが漂い、トンカツを囓る、さくつという音が微かに聞こえる。

刑事の取り調べかよ……と心の中で思いながらも、あまりにも旨そうなカツ井に限界を大きく超えた空腹が抵抗できるわけがない。ごくりと生唾を呑んだあと、男に倅って掻き込んだ。

今まで食った中で一番旨いカツ井だった。昨日からろくに食べ物をおらず究極の空腹とは言え、普通なら味などわからなくなつていても不思議じゃない状況。にもかかわらず、これだけ旨いなら、普通に食つたらどれだけ旨いんだ……と唸るほどだった。その旨いカツ井を食い終わるまで、男は何も訊かず、大澤が井を空にして大満足のため息とともに箸を置くまで、黙って呑み食いしていた。

「ごちでした」

「おう」

自分の井と、たつぷり注がれた酒のグラスをきれいに空にした男は、にやりと笑って大澤を見る。

その笑顔に、この人、今まで俺の周りにいた大人の誰よりも頼りになりそうだと感じた自分が不思議だった。なんというか……酸いも甘いも噛み分けた、という言葉がびつたりに思えた。

「で、おめえはいつたい何を困つてんだ？」

何を困つてんだ、の向こう側に『助けてやるぞ』が見えていた。

胃の中に詰まったカツ井が、心の澱を押し上げ口から吐き出させた。

「こんなガキに何させやがる！」

怒りを抑えられない様子で男が罵つた。そして同時に、そんな連中とつるんだおめえも大馬鹿者だ！と、拳固が降ってきた。

「でもまあ、よくやった。船で海に出て捨てるなんて上出来だ。お前、案外目端が利くんだな」

そう言いながら男は、改めて上から下まで大澤を眺めた。

「とりあえず親に連絡だ。きつと心配してるだろう。言いたくなければ詳しいことは抜きでいい。無事だつてことだけでも知らせとけ」

「うちの親は、俺のこと心配なんかしねえ！」

もう一発拳固が降ってきた。

その拳に込められた力はさっきの倍ほどで、目から火花が出そうだった。

「息子を心配しねえ親がいるか！ 今まで呑みだくれの亭主とぐれた息子、その両方から逃げ出さずに辛抱してたかーちゃんだぞ？ 心配してないわけがねえ。で、家の周りを物騒な奴らがうろつく、お前は帰ってこない、じゃあ今頃気が気じゃなくなってるはずだ」

半信半疑でかけた電話はワンコールで繋がった。その間合いが、男の言葉を証明した。怪しげな男たちが家の周りをうろついているけど、あんた何やったの？ なんかされたの？ 大丈夫なの？ と矢継ぎ早に訊く母に、うん、とか、ああ、とかいつもの無愛想な口調で答えたものの、どこにいるの？ という質問で答えに詰まった。

返答に困って絶（まが）のような目で見た大澤から、受話器を取り上げ、男は電話番号を言った。「ちよいと縁あつて息子さんと知り合いになつた者です。息子さんからヤクザと揉めたと聞きました。なんか危なそうなんではらくうちで預かせてもらおうかと……」

え……俺そんな話聞いてねえ！ と叫んだ声を無視して、男は大澤の母に白い粉の顛末を除いた状況を伝える。自分のところは息子さんとはもともと縁もゆかりもない場所

だ、怪しい連中はまず嗅ぎ付けられないから、ここでほとぼりを冷ましたほうがいい、なんてトークでさっさと話をまとめてしまった。

「というわけで、しばらくうちに来な」

「でも……」

「他に行けるとこあるってんなら、そっち行つてもらつてもいいが？」

「……ねえよ」

「だろ？」

袖すり合うもなんとやら……だ、と男は笑って、その夜から近所にある自分の家に大澤を泊めてくれた。驚いたことに、男は薬局を営んでいた。

こいつも薬局か……と思つたのが、顔に出たのだろう。

男は「同じにすんじゃねえ」と渋い顔をした。

それからしばらく、大澤はその家で暮らした。

駅から離れているせいとか、このご時世にこんな長閑な場所があったのか、と思うほど平和な商店街。チンピラはおろか、不良学生すら姿を見ない。顔見知りばかりの町で、薬局に新しい居候が来たことは、すぐに住民の知るところとなった。

ヤクザに見つかるのが恐くて引きこもり続けていた大澤に、男は何冊かの参考書を与えた。

「他の連中が知つてることぐらいわきまえとかねえと、この先、生きてくのも難儀なんびたぜ」
 他にすることもなく、もともと勉強が嫌いではなかった大澤は、小さな納戸なとどでその参考書を頼りに勉強を始めた。飽きてくると、腕立てや腹筋などの筋トレで気分を変えた。薬屋に住み込んで一週間が過ぎた頃、男は首根っこを掴むようにして大澤を床屋に連れて行った。

「うん。それならあんまり悪目立ちもしねえだろう。床屋代は出世払いにしてやるぜ」
 染めていた色を落とされ、さつぱりと刈り上げられた髪に、男がどこから調達してきてくれたごく普通のジーンズやシャツ。どこにでもいる高校生が鏡に映っていた。もう以前のくれた自分の面影おもかげはどこにもない。

この町には怪しげな輩もほとんどいないし、これなら商店街から出ない限り安全だ。そう考えた大澤は、やがて人の少ない早朝や深夜を狙って、商店街を何往復も走るようになった。

「お前いい身体してるな！ 足も速いし、持久力もある。こんなところでくすぶってな

いで、その体力使ってなんかやったらどうだ？」

大澤にそんな声をかけたのは、最初の夜にカツ丼を食べた呑み屋の店主だった。どうやら店を閉めて帰宅する途中らしい。

「十八だつて言ったな。だつたらそこそこ働ける場所はあるだろう。身体を活かせる仕事も……。ああ、そうだ、派出所にポスター貼つてあつたはずだ。あれなんか、ちよūdいいいんじゃねえか？」

そういえば、この先に派出所があつたな……。あそこに貼つてあるポスター？

店主の言葉が気になった大澤は、派出所に行ってみた。そこに貼られていたポスターには、陸海空という文字と、それぞれの制服を着て敬礼する凛々しい若者の姿が描かれていた。

そのポスターを見たとき大澤は、子どもの頃、ファイターパイロットに憧れていたことを思い出した。

日本で戦闘機に関わる場所は限られる。その頃はまだ父親の商売もうまくいっていい、当然大澤は跡を継ぐことを期待されていた。だから、憧れはしても戦闘機乗りにな

るといのはあまりにも非現実的だということぐらい、子どもの大澤にだって理解できた。

あの頃は到底無理だった。でも、今なら……？

父の商売は失敗し、もう跡を継ぐべきものはない。悪魔の白い粉を捨ててしまった自分はやクザに追われ、見つかったら命すら危ない状況だ。どうせ危ない命なら、そしてその命で守れるものがあるのなら、あの制服を着るといふ選択肢も十分ありだ。何よりも、そこに行けば給料が貰えて、もしかしたら母親に仕送りもできるかもしれない。

大澤が菓屋に居候いこうするようになってしばらく経った頃、母親から荷物が届いた。

少しばかりの着替えと身の回りのあれこれ、そして茶封筒に入れられた、しわくちゃの一万円札が数枚……

『到底足りないとは思うけれど、これを菓屋さんにお渡ししてお前の食費にでもしてもらってください。くれぐれもよろしくお伝えください』

お前に小遣いでも送ってやりたいけれど、そこまでの余裕はない。ごめんね……と結ばれた手紙の文字が涙でにじんだ。

こんな形で苦勞と心配をかけてしまった母に、今この状況で返せるものがあるとしたら、それは自分で稼いだ金しかないと思った。

ここに行けば母さんに仕送りもできる。そして、きっといつか戦闘機乗りになるんだ！

興奮したまま戻り、そんな決意を熱く語る大澤に、菓屋はちょっと待てと言った。

「お前、戦闘機に乗りたいのか？」

「ああ」

「だったら、中卒じゃ無理だ」

「え？」

戦闘機だけでなく、輸送機も救援機もヘリも、とにかくパイロットというものになるためには高校卒業という資格がある。今のお前には無理だ、と言われ、大澤はその場へたり込んでしまった。

せつかく将来の道が見えたと考えたのに……

座り込んだ大澤の目の前にしゃがんで、菓屋は、まあ聞け、と話を続けた。

「とりあえず試験を受けてこい」

「なんの試験だよ。中卒じゃパイロットになれねえんだろ？」

中卒でもこの制服を着ることだけならできる。給料ももらえぬ。全寮制だからヤクザからも逃げられる。そう言われるだろうと思った。とにかくこんな隠遁生活から足を洗え……と。

葉屋本人にしてもいつまでも大澤を抱え込んでいるよりも、そのほうがいいに決まっている。だが、葉屋は、厄介払いなどどうでもいいとばかりに話を続ける。

「そっちは後回しだ。まず、高校認定の方だ。それに通れば高卒資格が貰える」

高等学校卒業程度認定試験というのがある。今は四月の終わりだからまだ出願可能だ。試験は八月頭で末に結果発表。そこで高卒資格が得られれば、ぎりぎりその年度の試験を受けられる。その試験に合格すれば春から『いつか飛びたい連中』の仲間入りだ。口で言うほど簡単じゃねえ。ふるい落とされる奴はごまんといるらしい。だが、お前さえ本気ならできるかもしれない。なんとたつて、その年でヤクザからヤク奪つて海にぶちこむぐらい度胸あるんだから、見込みはある――

「どうだ、やってみるか？」

黙って頷いた瞬間から、大澤の生活は一変した。

なんとなくやっていた勉強も、暇つぶしだった筋トレやランニングも、全てが目標に向けてエンジン全開となった。

夜中まで問題集を解き続ける大澤に、葉屋は言った。

「視力落としたら終わりだぞ！ さっさと寝ろ！」

慌てて潜り込んだ布団の上に、真新しい箱入りの目薬が降ってきた。

八月、高校卒業資格を得た大澤は、九月、十月、十二月……と高い倍率の試験を次々突破し、翌年一月、合格通知を手にした。

「よくやった!!」

葉屋は大澤を抱きしめて背中をばんばん叩き、涙まで流して喜んでくれた。葉屋だけではなく、大澤を陰ながら応援してくれていた商店街の人たちも皆して、肉や魚、野菜や豆腐まで持って呑み屋に駆けつけ、店主が腕を振るって祝賀会まで催してくれた。

「頑張れよ！ 頑張つて飛べるようになるんだぞ！」

「地震とか台風とかあったら駆けつけてくれよー！」

「休みが取れたら遊びに来いよー！」

三月末、そんな声に送られた大澤は、東京から遠く離れた場所にある寮に入った。

訓練生としての生活は有意義だった。

大澤がぼんやりと思い描いていたものとはまったく違う、学業や訓練に明け暮れる生活だったけれど、確実に自分の技量が上がっていくことを実感できる充実した毎日。

訓練を終え、晴れて空を飛ぶ資格を得たあとは、空から国を守る仕事をする事になる。そのことになんの疑問も持っていなかった。ひたすら戦闘機の操縦席に座る自分を想像し、その日が必ず来ると信じていた。

だが、結果として大澤は、ファイターパイロットになることができなかった。

「君は戦闘機よりも輸送機か救難機に向いている」

およそ二年半の基礎教育と初級操縦訓練を終えたあと、告げられたその言葉に大澤は目の前が暗くなる思いだった。

「君は、あらゆる条件を検討し的確な判断をする思考力や、リーダーシップを備えている。それは、たくさんの人の命や物資を預かって、目的地まで確実に届けねばならない輸送機操縦でこそ活かされるだろう」

そう告げた教官の言葉は確かに正しいのかもしれない。教官に左旋回まがひしろ、と言われ

て反射的に操縦桿そうじゆうかんを倒せない自分は、瞬時の対応が何よりも必要とされる戦闘機には向かないのかもしれない。

それよりも、人であろうと物であろうと、とにかく預かった物は間違いなく届ける、という確実さが求められる輸送機に向いているだろう。

だがそれは、ファイターパイロットだけを夢見て訓練を乗り切ってきた大澤にとって、死刑宣告に等しかった。だが、今さらどうしようもない。輸送機だってパイロットはパイロットだ……そう自分に言い聞かせて、大澤はより実践的な飛行訓練を続けた。

それなのに、大澤の運命は過去から伸びてきた黒い手に狂わされた。

四年近い訓練を無事に終えた大澤は、休暇を利用して母親に会うために上京した。母親だけではなく、あの薬屋や商店街の人たちにも会いたかった。

東京駅から地下鉄を乗り継ぎ、両親が住むアパートに向かう。最寄り駅に降りて、薄暗い路地を通りかかったときのことだ。

若い男が、いかにもヤクザといった風貌の一人に取り囲まれ、袋だたきにされていた。二度とヤクザと関わり合いになどなりたくない、見て見ぬふりをしよう。

ここで自分が助けなければならぬ理由などない。こんなところでヤクザと諍いっかいを起

こしては、死にもぐるいで軌道修正した自分の将来にも差し障る。

見過ごせばいい、見なかったことにして通り過ぎるんだ……

けれど、できなかった。

もともと持っていた正義感と、四年の間に叩き込まれた守るべきものを守るという意識が、大澤の足をそれ以上前に進めることを拒む。

気がついたときには、ヤクザ相手に大立ち回りを演じていた。体力には自信があったし、何よりも四年間で得た『戦い方に関する知識』は半端なヤクザを寄せ付けもしなかった。だが、その立ち回りを遠巻きに見ていた中に、かつての悪友がいた。

「大澤、どうとう戻って来やがったか！」

ここで会ったが百年目、と暗く険しい目が言っていた。

かつて一緒に悪さをしていたその男は、大澤がバックバックから白い粉を抜いて姿を消したあと、お前なら大澤の行方を知っているはずだとヤクザたちに散々つるし上げられたらしい。

本当に知らないのだと、ヤクザ連中が納得するまでに肋骨を二本、脚を一本叩き折ら

れた挙げ句、逃げたなら仕方がない、お前が代わりにやれ、と運び屋にされた。明らかに犯罪だとわかっていても、報復が怖くて逃げ出せなかった。そのまま、ずっと暗い道を歩き続けてきた――

全部お前のせいだと、かつての悪友は大澤に恨みを投げつけた。見つかってしまった以上、貴重な収入源を海に捨てて組織をこけにした大澤を、ヤクザたちが見逃すはずもない。

『裏切り者は許さない』、それは期限おきてなどない掟おきてであった。

五年の間に倍では収まらぬほど怒りを増幅させたヤクザたちは、懐かどろにナイフや拳銃を忍ばせた男たちに大澤を襲わせた。行く先々で何度も乱闘になり、多勢に無勢で命からがら逃げ出した。

休暇で制服を着ていなかったことだけが救いかもされない。もしも大澤が属する組織がばれてしまったら――

それは組織を重んじる大澤が一番避けたい事態だった。

辞めるしかない……

彼らを振り切つて無事に組織に戻れるとは思えなかった。所属がばれば即不祥事騒ぎ。ヤクザ連中は大喜びでマスコミにあることないこと喋りまくる。国を守るべき組織のパイロットが、かつて『運び屋』だったなんて、いかにもマスコミが喜びそうなネタである。ヤクザは当然『不祥事ネタ』から生じる金を狙うだろう。

助けを求めて誰かに会えば、その相手すらも標的にされる。母にも商店街の人たちにも会うことはできなかった。

大澤は、上官に連絡を入れ、絶望とともに制服一式を返却した。

理由は言えなかった。ただ『一身上の理由』を繰り返す大澤に、上官は根負けした形で退職を認めてくれた。

退職を認められた大澤は成田空港に向かい、イタリア行きの飛行機に空席を見つけた。その飛行機の中で隣り合わせたのがB・Bだった。

胡散臭い……

まず最初に感じたのがそれだった。

胡散臭いというよりも焦臭いとすら言えそうなレベル。それは校舎の窓から匍匐前進訓練が見えるという、ある意味特殊な環境で過ごしてきた大澤だからこそ気付けたことかもしれない。

見た目が険しいというのではない。視線の鋭さと邪悪さを言うならば、このところ大澤を追い回していたヤクザたちの方がずっと度合いが上だ。そうした意味でB・Bはまったく目立たない。だが、大澤には、その目立たなさが明らかに狙ったものと思えなかった。

それを一目で見抜いたのは、お前がそれに近い世界で過ごしてきたからだ、とあとになってB・Bに言われたが、とにかく大澤はそのときのB・Bから常に三百六十度、どこから攻撃を受けてもかわせるぐらいの身構えを感じ取った。彼はただ飛行機の客席に座っているだけだったのに……

B・Bは、隣に座った日本人の若者に、至って気軽に『休暇か?』と訊いた。

彼は『終わりのない休暇だ』という大澤の答えに、わずかに目を見張ったあと、あれこれ質問を始めた。

日本人には見えないのに、流暢な日本語を使っていたことが、大澤の警戒心を薄れさせたのかもしれない。あるいは、ヤクザとの諍いから解放された安堵が招いた油断だったのか……

とにかく大澤は、B・Bに、自分の経歴を洗いざらい話してしまった。

適当な相づちと追加質問を繰り返しながら、巧みに大澤から事情を聞き出したB・Bは、しばらく無言で思いを巡らせていた。そして彼は言った。

『仕事がある。人手はいくらでもほしい。お前、あそこにいたなら体力はあるだろう。俺と一緒に来ないか。場合によっては飛べる可能性もある』

彼の言う仕事が決して安全ではないことはおおよそ見当がついた。それでも領いたのは、もう諦めるしかないと思つた夢に繋がる手段が、そこにありそうな気がしたから。そして、自分が鍛え上げてきたものに自信があつたからだ。

減多なことで死んだりしない。そう、戦争にでも巻き込まれない限り生き残れる。そのための方法は十分に学んだはずだ、と。

だがB・Bの言つた『仕事』が、荒つぱいどころか本当の軍隊だと知つたときには、さすがに参つた。戦争にでも巻き込まれない限り、という大前提が初っぱなから崩されてしまった。

『なんてとこに連れてきやがる！』

国連軍に与する某国外人部隊。大澤はいきなりその新兵訓練に突つ込まれた。

四ヶ月間死にもぐるいで耐えきつたのは、意地以外の何物でもない。その後、大澤は一年ほどそこにいたが、B・Bの指示に従つて除隊。幸い、実戦に駆り出されることは一度もなかつた。

『実地訓練終了だ』

嘩然とする大澤にB・Bはにやりと笑つてそう言つた。それから、東南アジアに行った。中東と東南アジア、どっちがいい？ と選択肢を与えられ、イスラムは食い物が合わない、と答えた。

B・Bは、まともな食い物があるだけだぞ、と不可解な笑いを漏らしながら大澤を東南アジアに送り込んだ。彼が民間軍事会社のエージェントだと知らされたのはそのときだった。B・Bは集めた人材に教育を施し、世界各地の紛争地域に送り込んだり、要人警護にあたらせたりといった、いふなれば新しい形態の傭兵組織の一員だったのだ。大澤のような経験を持つ人間は、彼の会社にとって格好の人材と判断されたのだろう。少数民族解放戦線の陸兵として、支給された小銃を受け取りながら、決定的に間違つてしまった自分の人生を悔いた。

それまでいた外人部隊は、それでも正規軍で、若干のニュアンスの違いこそあれ公務員の一種だった。だが、この場所では自分は傭兵、つまり戦争屋だ。

金と引き替えに命を張り、戦場から戦場へと渡り歩く。そしてその命と引き替えに得るはずの金も、世間で思われているほど高給なんかじゃなかった。

『馬鹿か、お前は。傭兵に高い金払えるぐらいなら、ちゃんとした軍隊抱えるだろう』
B・Bのその言葉の意味は、ジャングルを這い回るうちにどんなん身に染みてくる。

食料、装備、そして人員……全てが足りない状況で『正義は我にあり』という思いから、あるいは何らかの高揚感だけを求めて戦っている兵士たち。決して金のためじゃない、と実感させられた。そして大澤には、そこまでの正義感なんて備わっていないし、戦場で高揚感を求める性癖もない。

自分が武器を取らねば、もつと拙い誰かがその役割を担うしかなくなる。そしてその拙い誰かは、ときに子どもだったりもする。いくらなんでもそれはひどい……と必死で自分に言い聞かせた。

それでも、自分の国ですらない民のために、泥にまみれ銃弾の下をかくぐり続ける生活には限度があった。だが、大澤はこの状況でどうやったら自分の人生を軌道修正できるか見当もつかなかった。いくらこれまで生きてきた環境と遠く隔たっているとして

も、日本に戻ることができない以上、B・Bに言われるままに戦地を回るしかなかった。

* * *

「大澤……?」

外人部隊を除隊し、傭兵としてあちこちの戦場を巡って三年の年月が過ぎた。

東南アジアのとある国で、戦闘がインターバルを迎えしばらく動きがないと思われたある日、大澤は数人の傭兵とともに川向こうの国に遊びに出かけた。その先のバーで呑んでいた大澤に、声をかけた男がいた。

肌も髪も日焼けして、風貌はおよそ日本人から遠くなっていたはずなのに、仲間が口にした「オーサワ」という言葉に反応したらしかった。

日本を出てからほとんど聞くことがなかった正しいアクセントの自分の呼び名。大澤はかなりの懐かしさと、それから一抹の面倒くささとともに振り返った。

「原島……」

小学校を卒業するまで近所に住み、親友だった男。

原島財閥の跡取り息子、というよりも、すでに跡は取ったであろう原島俊紀。その男が、まるで幽霊でも見るかのような顔で大澤を見ていた。

「お前、何やってるんだ、こんなところで!？」

それはこっちの台詞だ、と言いたかったが、原島俊紀はいかにもエリートビジネスマンといったブランドスーツを着て、磨き上げられた靴を履いてそこにいた。

一方大澤はすっかり面変わりして、荒っぽそうな、見るからにコンバットマーチが似合いそうな一団に、違和感なく紛れ込んでいる。日本人としてどちらが異様かは比べるまでもない。

「久しぶりだな……」

それ以外に言葉が見つからなかった。

そんな大澤を、原島俊紀は自分がいたテーブルに連れて行き、小学校を卒業してから今までに大澤の身の上で起こった出来事を無理矢理のように聞き出した。本心を言えば日本人、さらにかつての親友である原島俊紀に事情を知られるのはいやだった。だが原島俊紀は、口を閉ざす大澤の心情など知ったことかとばかりに問い詰めた。

「傭兵なんだな？」

話の最後に原島俊紀はそう確認した。諦め半分で頷くと、それなら大丈夫だ、と彼は

言った。

「大丈夫だ、傭兵なら辞めることができる。一緒に日本に帰ろう」

「だが……」

帰ってどうする。

日本を出てから五年が過ぎていた。ヤクザから白い粉を奪って捨てた挙げ句、見つかって殺されそうになって日本を逃げ出し、その後外人部隊を経て傭兵になった。そんな男が、日本でどうやって生きていけるのだ。第一、日本に戻ったら自分はまたヤクザに命を狙われる。

当然の不安を口にした大澤に、原島俊紀はあっさり言った。

「うちに来い」

「原島財閥にか？ 今さら普通のサラリーマンなんてできねえよ」

「サラリーマンにも色々ある。お前の命を狙ってる奴らも、まあなんとかするさ」

B・B以上に胡散臭い笑顔で、原島俊紀は有無を言わず大澤を日本に連れ帰った。

大澤は支給されていた小銃や備品を隊に返し、仲間別に別れを告げた。これまでもいきなり隊を離れる傭兵はいくらでもいたから、仲間たちも何も訊かなかった。

もしかしたら、臆病風に吹かれて逃げ出すのだと思われたのかもしれない。だが、そ

れもどうでもいい。これを逃したら自分が日本に戻る機会は永遠に訪れないだろう。残してきた家族もいる。チキンと呼ばれようがなんと呼ばれようが気にしている場合ではなかった。

傭兵部隊との折衝は、全て原島俊紀が手を回してくれた。しかも、原島財閥との関わりを隠したまま。おそらく、居場所を探され傭兵組織に連れ戻されたりしないように、という配慮からだったのだろう。大澤は自分でも驚くほどスムーズに傭兵を辞めることができた。

五年ぶりに帰国した大澤は、さらに驚かされることになった。

原島俊紀がどういう手を使ったのかはわからないが、大澤を狙っていたヤクザたちは次々と逮捕され、組は体をなさなくなっていた。

金を払ってくれる雇い主がいなくなつてまで、大澤を狙い続ける人間はいなかった。

大澤の日本での生活はかなり静かに再開され、今までの逡巡も、地を這い回るような生活も、すべてが過去のものとなった。

帰国後、大澤は原島財閥の緊急対策班に入った。

それは今まで培ってきたノウハウを活かせ、尚かつまっとうな経歴を必要とされない都合のいい仕事だった。自分に欠けていた最先端の情報機器についての知識やその操作法を徹底的に学び、三年の間に緊急対策班班長という地位に上り詰めた。原島財閥のあらゆる困り事を解決する万屋の頭となったのだ。

あのとき、あの場所で原島俊紀に再会しなかったら、今も自分はどこかのジャングルで地に伏したまま小銃を構えていたかもしれない。あるいは軽量型の対戦車砲を背負って茂みに潜んでいたか……。いや、それ以前に銃弾に撃ち抜かれ負傷、あるいは命を失っていた可能性の方が大きいだろう。

さらに原島俊紀は、気になっていた母親と連絡を取れるようにしてくれた。ヤクザに追われ、連絡すら取れないままに日本をあとにし、外国人部隊を経て各地の戦場へ。その間、母親との連絡は一切取れなかった。五年ぶりに帰国してすぐに以前の住所に行ってみたが、古いアパートは取り壊され、マンションが建てられていた。大家を探し出して訊ねてみたが、母親はそこには住んでおらず、転居先として記された住所にもいなかった。

手段はあるに違いなかったが、緊急対策班員として身につけなければならないあれこ

れに追われ、探すことができずにいた。そんな大澤の代わりに、俊紀が母親の転居の痕跡を辿たどってくれた。

五年の間に父親は病に倒れ、生活はさらに困窮こんきゆう。もうこれまでか……と思つたところで父親が亡くなり、医療費から解放された。独り身となった彼女は神奈川にある寮完備の工場で働いていた。

大澤はすぐに母親を迎えに行き、原島邸近くにあるマンションに住まわせた。そのマンションは原島財閥が所有しているもので、俊紀は家賃など不要だと言つた。だが大澤は俊紀に大いに感謝しつつも、ささやかながら家賃を支払っている。他に示しがつかないから、というのが理由だった。

近だけあつてちよくちよく顔も見に行けたし、非番のときは泊まりにいった。

それから数年後、彼女は病に臥ふしたが、その際も俊紀は直ちにしかるべき病院を世話してくれた。命の終わるその瞬間まで母は原島家に感謝し、その恩恵にあずかつたまま静かに逝いつた。

原島俊紀に対する感謝は言葉では言い尽くせない。たとえ日頃どんなにひどい言葉の応酬があつたとしても、大澤は原島俊紀と彼の属する原島家を守るためなら命を捨てる覚悟がある。

自分の人生のやりように困り果てていた大澤を救ってくれた原島俊紀。彼のために自分は一生緊急対策班としてこの身を捧げる。それが大澤の感謝の表し方だった。

それなのに……何故今ごろあいつから連絡が来るんだ……

詰め所にあるもうひとつのソファでは、部下のひとりがつらうつらと船を漕こいでいる。明け方も近いような深夜、特に気を配らねばならない状況もなとなつたら緊張が緩むのは仕方がない。それでも邸内の異常を知らせるアラームが鳴り響いた瞬間、反射的に臨戦態勢に入れるだけのものは身につけている。それならば休めるときは休んだほうがいい。

大澤は気持ちよさそうに眠る部下に目をやり薄い笑いを漏もらしたあと、思いを過去から現在に切り替える。

このメールを無視したところで、あの男はそう簡単に諦めたりしない。同じようなメールは何度でも送られてくるだろうし、いずれ目の前に現れるだろう。

B・Bにとって大澤は非常に有能かつ使い勝手のいい駒だった。大澤を見つけた以上、B・Bはあの手この手で自分の許たぐに手練りよせようとすることに違いない。

いつまでもB・Bという存在に煩わ^{わづら}されては、原島邸の警備に支障がでかねない。それならば、あるという話をさっさと聞いた方がいい。

そう判断して、大澤はB・Bのメールに返信を打ち、五年ぶりに会う約束をした。

再会したB・Bの容貌が、流れた歳月の長さを物語っていた。髪に白いものが交じるだけではなく、全体的に色が抜けたように見える。目尻や口元に細かい皺^{しわ}も見受けられた。大澤にしても、自分が昔とまったく同じではないことぐらいわかっている。だが二十代だった自分と、既に壮年期に入っていたB・Bでは歳月から受ける影響の大きさが違っていたようだ。それでも、挑発することで相手の感情を引き出そうとするやり方は、昔と全然変わっていないかった。

「原島の犬は面白いのか？」

B・Bはいきなり大澤を怒らせるようなことを言った。

数年前の自分なら確実に殴りかかっていただろう。けれど、そんな短気は緊急対策班に入ってから捨ててさせられた。常に冷静沈着であること、その上で、原島にとって最

善の選択をし、迅速に動くこと。それが緊急対策班として求められる最初の項目だった。

だから大澤はB・Bからどんな煽りを受けても、受け流すことぐらい簡単にできた。

傭兵部隊から煙のように消え失せた大澤を、B・Bはずっと探していたらしい。

当然だろう。民間軍事会社という組織からすれば、大澤の素養と経験は手放しがたい。どんな戦地にでも自信を持って送り込める駒だ。その駒に自分が目を離している隙に逃げられたとあっては、沽券^{こけん}にも関わる。彼はヤクザたちに劣らぬ執念深さで大澤を捜したに決まっている。我ながらよくぞ五年もこの男から隠れきったものだと思う。

それはもちろん原島財閥の負うところが少なくなかった。大澤が傭兵となった経緯を聞いた俊紀は、大澤が再びB・Bの組織に絡め取られないように細心の注意を払って、脱退の手続きをしてくれたに違いない。

それでもB・Bは諦めず、とうとう大澤を捜し出した。

「ああ、楽しい。何よりここは食い物が旨い」

大澤は、中東か東南アジアかと聞かれたときと同じようなニュアンスで答えた。

「またそれか。お前は本当に飯さえ旨ければいいのか？」

「ま、そう思ってくれていい」

「誰がそんなこと信じるか。お前の望みはそんなことじゃなかったはずだ」

「俺の望みはジャングルを這い回ることもなかった」
 「それはただの通過点だ」

「その通過点は本当に通過できるものだったのか？」

「大澤……」

「あの頃、俺はいつか飛べると信じてた。だが、それはあなたにそう思わされていただけで、実際はあなたの会社に都合よく利用されただけ。あのままあそこにも、ずっと同じだった。軍から軍へ、戦場から戦場へ、ただ流されて走り回るだけ。俺が飛べる日なんて来なかった」

大澤は日本を出ると決めた時、まだ飛びたいという志を捨ててはいなかった。

民間機の操縦訓練は受けていない。受けたのは輸送機、しかも軍用機だ。飛行機に乗りたいたならば戦場に行くしかないと言われ、そんなものとB・Bについていった。

けれど、傭兵になってわかったのは、一機が目の玉が飛び出るほどの値段である飛行機を傭兵なんかには任せる軍隊はないということだった。

傭兵というのは主に使い捨ての陸兵だ。走り続けてこそその世界、飛ぶことを求められることはない。本人がそれを求めても、許されることもない。

そうしている間にパイロットとしての腕は劣化し、飛行時間ノルマをこなせなくなり、事実上飛ぶこともできなくなる。傭兵にいる限り、自分が飛ぶことなど不可能だった。

「見事に騙されたよ。俺が馬鹿だった。甘ちゃんだったんだよ、あの頃の俺は。知識と体力はあったが社会経験皆無の大馬鹿野郎。だが、今の俺はもう違う」

冷静に話す大澤にB・Bはしつこく食い下がった。

「正規軍、しかも空軍に入る仕事がある。お前の腕ならばらく訓練すれば……」

「もう騙されねえって言うてるだろ。軍用機で飛ばなくなつてどれぐらい経ってるか、俺が一番知ってる。あの頃俺が飛ばしてた機種で、今も現役で飛んでる奴がどれだけあるかも疑問だ。もう俺は戦闘機乗りにはなれない。そんなものを餌に声をかけてくるのは胡散臭すぎる。B・B、あなたの本当の狙いはなんだ？」

わずかに細めた目で、大澤はB・Bをじっと見た。

B・Bはふーっと大きく息を吐いて、大澤の顔を見返した。なぜか、あの外人部隊で新兵訓練を終えたときのように、よくやった、と言わんばかりの表情が浮かんでいる。

「大人になったな、大澤」

「ふざけんな！」

「もうお前を戦地に送ることはしない。お前はそのレベルを越えた。俺は今から会社を

興す。お前一緒にやらないか？」
「はあ？」

ネゴシエーターを育成し、世界中に派遣する民間会社を作る。

ドラマや映画で知名度を上げつつあるネゴシエーター、つまり交渉人という仕事は警察など公的組織の一部分である。

日本においてもネゴシエーターの重要性は理解されており、警察の中にも専門部署がある。

だがその育成はとてもじゃないが順調とは言えず、数も足りない。慢性的に人手不足である公的組織において、ネゴシエーターになりうるほど優秀な人材を、ずっと交渉事だけに貼り付けておくこと自体に無理があるのだ。

その事情は日本だけでなく世界でも同じこと。優秀なネゴシエーターさえいけば、悲惨な結末を迎えることはなかったと予想される事件はいくらでもあるし、これからも起こり続けるだろう。

極端な話、内紛から戦争に発展するような事態を、ひとりのネゴシエーターが止めることだって不可能ではない。公的機関で用意しきれないネゴシエーターを自分で育成し、

必要に応じて派遣する。それがB・Bの目指すところらしい。

「権力に潰されかけて、潰されまいと戦う民族のために今まで俺は武力を使ってきた。始まってしまった戦争は簡単には止められない。だからこそ、戦場に人を送り、俺自身も参戦してきた。だが、それには限界がある。どうしたってどっちな犠牲者が出る。ならば、戦争に至る前の段階で武力抗争を止めるほうがいいと思わないか？」

何十年も戦地に人を送り込んだ結果、俺はやっとそのことを悟ったんだ、とB・Bは自分を嘲るように言った。

「俺が送り込んだ人間が何人も死んだ。何人もじゃない、何十人も、だな。俺が送り込んだ人間が傷つけた数は、その何十倍にも何百倍にもなるだろう。民間人で巻き添え食った奴を含めれば、いったいどれぐらいの人間が死んでいくのか……俺自身の命だって明日をもしれない。それを思ったら虚しくなった」

当たり前だ、と大澤は思う。

もともと戦争とはそういうものだ。何を今さら……である。

だが、B・Bの言わんとするところはわかる。武力ではなくそれに至る過程で止める。それは、今まさに、大澤が原島財閥緊急対策班においてやっていることである。あらゆる